

心豊かでたくましい児童生徒を育む

小中一貫教育をめざして

シリーズ えでゆれば

vol.18

小中一貫教育により子どもたちは

どう変わっていくのか

施設一体型小中一貫教育学校の開

校を7ヶ月後に控えた8月5日、三戸小学校に隣接した高等部校舎の多目的ホールで、三戸町連合PTA(藤原文雄会長)と三戸町教育委員会が主催する教育研修会が開催されました。

講師には、品川区立小中一貫校伊藤学園の初代校長を務め、現在は目白大学人間学部児童教育学科教授の小林福太郎先生をお迎えし、『小中一貫教育に期待される子どもの変容』小中一貫教育の教育的効果から』と題した講演が行われました。保護者や教職員のほか、地域住民など約70名が参加し、間近に迫った開校に向け真剣に耳を傾けました。

今回はこの講演内容に沿って、小中一貫教育の先進地である品川区の子どもたちが、どのように変わって

いったのかをお伝えします。



講演に耳を傾ける参加者

◆品川区が抱えていた問題

かつて国鉄の官舎が建ち並ぶなど児童生徒数の多かった品川区は、20年間でその数が半減しました。しかし、学校数は減らなかつたため、1学年1学級(単学級)の学校が増え、学校規模が小さくなることによるデメリットが多くなっていました。

◆小中一貫校の導入へ

小中一貫教育を行う方法はさまざまあり、全国では小中学校の枠組みを越えた取り組みが数多く行われています。

つまり、品川区や三戸町の取り組みは何も特別なことではなく、国の有識者会議でも提言されている「新しい時代の義務教育」のかたちであると言えます。

◆小中一貫教育を進める背景

国では、どんな内容をどの学年で、どのくらい学習するかなどを学習指導要領で定めています。この学習指導要領は、おおむね10年に1度改訂されますが、教育にはいつまでも変化しない本質的なもの(不易)と、新しく変化を重ねていくべきもの(流行)があります。

子どもの実態と変容を見ると、兄弟姉妹数やよく遊ぶ友人の数は減り、自分の身のまわりや部屋の片付

けをする割合は減っています。また、身長伸びのピークは50年前に比べると大幅に低年齢化しています。さらに不登校の発生や学習に関する悩みは、小学校6年生と中学校1年生との間に大きなギャップが生じており、これらの現象は「中1ギャップ」と呼ばれています。

現在の学校制度は、こういった社会の変化に正対できているとは言えないのではないのでしょうか。

多くの小・中学校は、6年間と3年間が完全に分かれた自己完結型であるため、子どもの成長の連続性が意識されにくく、前述の「中1ギャップ」のような現象は、お互いに責任が転嫁されがちです。小中学校の文化の違いと言ってしまえばそれまでですが、これらのことが学校教育を硬直化させているのではないのでしょうか。

◆小中一貫校の教育的効果

小中一貫校には、5つの効果が期待されます。

1 学びの連続性による学習効果

学習内容の系統性や継続的な指導、つながりを意識した指導の実現により、学力の向上が期待できます。

2 中1ギャップの解消

不登校などの学校不適応や暴力行為などの問題行動が減少します。

3 継続性のある生徒指導の実現

一貫した指導と、小中の情報共有や共通の実践により、生徒指導がしやすくなります。

エピソード

生徒指導が困難な子（中学生）がいました。生徒指導に定評のある中学校の先生が他の区から転勤してきていたのですが、体格の良いこの先生でも、その子を抑えきることができませんでした。

抑えることができたのは、小学校低学年の頃からその子を見ていた1人の小学校の先生でした。子どもの育ちを見守ってきた先生がいるということは、生徒指導面でも心強いことです。

4 異年齢集団の交流による効果

普段の勉強が得意でない上の学年の子でも、授業交流で下の学年の子に教えるとなれば、一生懸命勉強して教えようとします。交流給食も同じで、一緒に楽しく食べようとします。

これにより、上の学年は同学年の集団では得られにくい※自己有用感

を持つことができます。また、下の学年は上の学年に対する憧れを持つようになります。

すなわち、兄弟姉妹の人数が多かった頃は家庭や地域が担っていた機能を、学校の中に持たせることが可能になります。

※自己有用感

自分がしたことを感謝されてうれしい、自分は頼りにされている、自分も誰かの役に立っているなど、他者と交流することで得られるこれらの感情のこと。

5 特色のある教育の推進

平成10年度に改訂された学習指導要領では、特色ある教育、特色ある学校が求められています。小中相互の教育文化を融合すること自体が特色のある教育の宝庫であり、学校力の向上につながります。

◆概念の枠から抜け出す

これまで積み上げてきたものを否定することは簡単ではありません。しかし、概念を崩すことで、一貫教育の効果は高まります。

「はじめに子どもありき」の精神を貫き、本来の目的を見失わなければ、大きな成果が得られます。

◆保護者からの質問

Q 自分子どもは現在5年生で、一貫校の開校時は6年生になります。4・3・2制の中等部ということになりませんが、中等部の先生に負担が偏り、そのしわ寄せが子どもたちに影響するということが無いのでしょうか。

A

初等部は従来どおりのきめ細かい小学校の教育、高等部は従来どおりの高校進学へ向けた中学校の教育と大差ありません。

小中一貫教育のポイントは間違いないで、中等部にあります。どれだけ上手くチームを組めるかにかかっていますが、負担が偏らないようにするのは我々管理職の役目です。

中等部で勤務した先生の感想は、とてもやりがいがあった、勉強になったと前向きなものばかりでした。

質問した保護者からは、「小中一貫教育にはメリットだけではなくデメリットもあると思っていました。」「その不安は払拭されました。」「感想をお話いただきました。」

参加者にとっては、先進校の校長経験者から子どもたちの変容を聴く機会が得られたことで、非常に有意義な研修会となりました。

講師紹介

目白大学人間学部児童教育学科教授 小林 福太郎 先生



◆職歴・経歴

東京都の公立中学校の教員を皮きりに、東京都教育委員会指導主事・副参事、中野区教育指導室長を歴任し、品川区立小中一貫校伊藤学園の初代校長を務める。

2009年から現職。研究テーマは、「教育改革を実現するための戦略と実践方法」「道徳教育の定着と充実を図るための理論と方策」

練馬区、新宿区、武蔵村山市等で小中一貫教育のアドバイザー・学校評価委員等を務めている。

◆著書

- ・「学力調査結果を活用した学校経営改善」（共著）第一法規出版
- ・「市民科で変わる道徳教育」（共著）教育開発研究所
- ・「生徒指導提要」（執筆協力者）文部科学省